

口頭発表

動物介在療法 セラピードッグと行う機能訓練 —セラピードッグの現状—

佐藤美月¹⁾・高橋 文¹⁾・佐藤駿矢²⁾・庄司英子²⁾・齋藤久美子^{1)*}・的場美芳子¹⁾

- 1) 学校法人日本環境科学学院 専門学校アニマルインターカレッジ
2) 社会福祉法人国見会 特別養護老人ホーム国見苑

Animal assisted therapy: Functional training with a therapy dog -About the current state of the therapy dog-

SATO Mizuki¹⁾, TAKAHASHI Aya¹⁾, SATO Shunya²⁾, SHOJI Eiko²⁾,
SAITO Kumiko^{1)*}, MATOBA Miyoko¹⁾

目的

セラピードッグには、介入の仕方やトリック(芸)を教えるなど、厳しいトレーニングが必要と考えられがちである。しかし、その犬の性格やその犬ができることを生かしたセラピードッグの介入の仕方は、セラピードッグに負担をかけることなく動物介在療法(以下AAT)を行える。そこで、犬の性格に着目したプログラムの構築を目指した。

方法

1. セラピードッグについて

トイ・プードル(ホワイト), グリコ, 8歳, メス, 約5kg。専門学校アニマルインターカレッジで飼育されている学校犬。獣医師による健康診断と専門学校アニマルインターカレッジ認定セラピードッグの適性審査に合格している。

2. クライアントについて

83歳の女性。先天性変形性股関節症, 高血圧, 脳出血後遺症, 白内障, 胸腰椎圧迫骨折(複数回), 左膝内顆骨折, 骨盤後傾, 右股関節の痛みがある。AATについて説明をして, 同意を得た。

3. 内容

平成27年5月22日から9月18日の約4ヵ月間にわたり実施。月3, 4回(毎週金曜日)に約45分間, 作業療法士が行うリハビリ内容に沿って行った。

リハビリプログラム①

肩関節の挙上(腕の関節可動域訓練)

クライアントは車椅子に座り, 作業療法士の促しに合わせ, 両腕を挙げる。その際に, セラピードッグは

クライアントの目の前で, 同時に立ち上がり, 前肢を挙げて見せる。(10秒×10セット程度)

リハビリプログラム②

肘の伸展運動(腕の関節可動域訓練)

クライアントは車椅子に座り, 作業療法士の指定した位置までフラフープを上げて持つ。そのフラフープをセラピードッグが跳ぶ。(10回×3セット程度)

リハビリプログラム③

短期記憶の確認

コップを4～5個準備し, クライアントにどれか一つを選んでもらう。選んでもらったコップに犬のおやつを隠し, クライアントにコップを覚えておいてもらう。その後, 全く違う話をしたり, リハビリを一項目挟んだりした後に, 犬のおやつが入っているコップを当ててもらおう。セラピードッグは匂いを嗅いで, おやつが入っているコップの前で伏せをするので, クライアントにそのコップで合っているのかを尋ねる。

結果

セラピードッグの個性を尊重し, その犬が習得しているトリック(芸)を機能訓練に活用することによって, セラピードッグをトレーニングで強要することなく, またストレスをかけずにAATを行うことができた。セラピードッグが苦手とすることを取り入れるのではなく, セラピードッグもAATのセッションを楽しめる方法をとることにより, クライアントはセラピードッグの楽しそうな姿を見ることができ精神面で安心できるのではないかと考える。

*連絡先: 〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町2丁目2-3 専門学校アニマルインターカレッジ



写真 犬のおやつが入っているコップの前で伏せをするセラピードッグ

考察

私は、学校でのアニマルセラピー実習として、担当犬(セラピードッグ)を連れてAATに参加した。担当犬は活発な犬であり、大人しくじっとして撫でられることなどが苦手であった。作業療法士が行う通常のリハビリを見学させて頂き、この部分であれば担当犬が活用できるかもしれないということを見出して、リハビリプログラムに介入することに重点を置いた。本来ならばAATには不向きかもしれない担当犬だったが、担当犬の好きなこと、得意なことを作業療法士とも話し合い、それを組み込む形で機能訓練プログラムを作っていた。元々の犬の性格、持ち合わせているトリック(芸)を利用すれば、いくらでも活動の幅は

広がる。また、犬の得意分野を広げることにより、ストレスの軽減も考えられる。犬の些細な良さを見逃さず、今後も活動に取り組んでいきたいと思う。

謝辞

本研究活動を行うにあたり、貴重な時間を割いて協力して頂きました特別養護老人ホーム国見苑の施設長の庄司英子様、作業療法士の佐藤駿矢様に心より感謝申し上げます。また、本研究のご指導を賜りました的場美芳子先生、齋藤久美子先生をはじめとする専門学校アニマルインターカレッジの諸先生方、共同研究者の高橋文さんに深謝いたします。